



Success Story

さくら情報システム株式会社 | ER/Studio



ER/Studio Data Architect を開発プロセス標準で選定、300 名に大規模研修を実施、金融系大型案件で活躍

「大規模システムのデータモデリングは ER/Studio Data Architect でないと厳しい。テーブル数が 300 を越える規模になると、全体を見渡す上で専用ツールが欠かせない」

さくら情報システム株式会社 森 隆彦氏

さくら情報システムは、データベース設計ツール ER/Studio Data Architect を同社の開発プロセス標準で採用し、2 件の金融系大規模案件を含む実績を挙げた。2014 年現在で 11 部門、28 名のメンバーがデータモデリングに活用中である。約 300 名を対象にデータモデリングに関する大規模研修を実施。開発プロセス、ツール、教育の 3 本柱で組織としてのデータモデリングの能力を高めた。

同社の開発プロセス標準の策定に関わったさくら情報システムの森隆彦氏は次のように語る。「小規模システムは Excel を使ってデータモデルを設計している例が多かった。だが大規模システムのデータモデリングは ER/Studio Data Architect でないと厳しい。テーブル数が 300 を越える規模になると、全体を見渡す上で専用ツールが欠かせない」。

2000 年代の前半、ホストからオープンシステムへの移行、いわゆるレガシー・マイグレーションの案件が多数発生した。これに呼応して RDB (リレーショナルデータベース) を基幹システム、大規模システムで本格活用する構築ニーズが高まった。この開発経験を今後のシステム開発に生かすため、同社は 2011 年に開発現場で活用するための「データベース設計開発ガイドライン」を作成した。この成果は、2013 年に整備された新しい開発プロセス標準「Sakura-NAVI」に盛り込まれた。ここでツールとして採用されたのが、ER/Studio Data Architect だったのだ。



開発技術部 開発推進グループ グループ長
森 隆彦氏

同社の顧客は金融系が主である。大量データを扱いつつ、高可用性が要求される。そこで同社が重要視する技術には、例えば高可用性を実現するためクラスタ技術 Oracle RAC (Oracle Real Application Clusters) の活用、Java および .NET によるアプリケーション開発技術などがある。これらアプリケーション開発向けの技術やインフラ技術と並んで重要視するのがデータモデリングである。同社は「大量のビジネスデータを扱う以上、データの扱いはしっかりしないと」と考えたのだ。

こうして開発プロセス標準を整備しつつ、データベース技術者のレベルアップを図った。同社の開発本部のエンジニア約 600 名のうち半数に相当する約 300 名を対象に、2011 年から 2014 年まで 3 年がかりでデータモデリングに関する大規模な研修を実施したのである。

さくら情報システム



ER/Studio

会社名

さくら情報システム株式会社

業種

システム開発

ツール

ER/Studio Data Architect、
ER/Studio Viewer、ER/Worksheet*

課題

- データベースを高品質、高効率に設計したい

解決策

- 社内での大規模研修で実践的なデータベース設計の技法を習得
- ER/Studio を標準ツールとして採用

研修の実施

株式会社アシスト



ER/Studio 販売代理店

富士通エンジニアリングテクノロジー株式会社



* ER/Worksheet は富士通エンジニアリングテクノロジー株式会社 が提供する ER/Studio と Microsoft Excel との双方向連携ツール

ここで研修を担当したのが、Oracle 製品の導入、教育で豊富な実績を持っていたパッケージ・インテグレーターのアシストである。2010 年頃、複数の同社の中堅技術者がアシストの研修コースを受講して評価した結果、「実践的な内容」との評価を得て大規模研修を依頼することにした。「教育専門の会社とは違い、実践経験が豊富な人が講義する。ケーススタディを踏まえて話していくので理解度が違う」（森氏）ことが教育ベンダー選定の決め手となった。

例えば、上級の研修コースには、アシストのコンサルティング・サービスが採用する独自のモデリング手法*のエッセンスを盛り込んでいる。研修テキストをもとに講義する教育に留まらず、開発現場に対するコンサルティングで使われているノウハウを取り入れた。

* データモデリング以外には、ビジネス、システム、オペレーショナル・モデリングがある

上級者向け研修を担当したアシストの高田京児氏はこのアシスト独自の手法について、次のように語る。

「300 テーブル規模となると、データモデリングも納期との戦いとなる。そこで場数を踏んだ設計者は手順を省略していきなり第3正規化から書き出す場合が多いが、そこで属人性が発生する。こうしたスピードを要求される現場の実情に合わせ、ビジネスの視点からデータモデリングのための独自の方法論を作り上げた」

この研修の準備と同時期の2010年に、データモデリングのためのツールとしてER/Studio Data Architectを選定した。「ERモデルにフォーカスしたツールが欲しい」というニーズを背景に評価を実施した。ER/Studio Data Architectを選んだ理由は、大規模なデータベース設計の機能に優れており、Excelをデータベース設計に使うやり方に比べはるかに見通しが良くなることだ。「マスターとトランザクションで色分けする機能一点を取っても、ER/Studio Data Architectでなければ大規模システムは厳しいと感じさせられた」（森氏）。

もう一つの理由は、ER/Studio Data ArchitectとExcelを連携するアドオンツールER/Worksheetの存在である。



開発プロセス策定と研修実装メンバー：さくら情報システム株式会社 森隆彦氏（前列左）、島慎哉氏（前列中心）、尾沢裕司氏（前列右）、株式会社アシスト 代裕介氏（後列左）、高田京児氏（後列右）

このアドオンツールを開発したのは日揮情報システムで、ER/Studio Data Architectのメンテナンス契約を結んだ顧客に対して無償提供する。いわばER/Studio Data Architectの「おまけ」のツールだが、「この『おまけ』も魅力的だった」と森氏は語る。

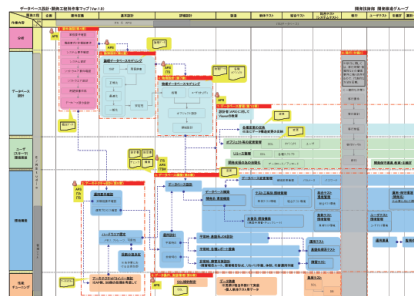
「Excel上でテーブル項目名を変更するとシステム全体に派生する。これがあると楽だとしみじみ感じて、このツールが欲しくてしょうがなくなった」（森氏）。さくら情報システムの尾沢裕司氏も、技術チームの現場の立場から「Excelを使えればデータベースを変更できる。扱える人の幅が大きく広がる」と評価する。

開発現場で使ってもらうには、ツールの使用に対する抵抗感を取り除くことも重要だった。「最初は、使い慣れているExcelを使いたがる。研修を何度も実施してExcelよりも専用ツールの方が使いやすいことを覚えてもらった」（森氏）。ツールの費用を開発推進グループが負担することで、現場から見れば費用が発生せずに使えるようにもした。結果、「お金がかからないし、便利だし、それではER/Studio Data Architectでやろう、という声が大きくなった」（森氏）。

開発プロセス標準化の時期にデータベー

ス専門部隊を率いたさくら情報システムの島慎哉氏は「現場のファーストチョイスがER/Studio Data Architectになった」と話す。「これは大きな変化だ」。

同社はまた、データモデルの参照ツールであるER/Studio Viewerも活用する。「プログラム設計や詳細設計を担当する開発メンバーは、データモデリングはしないが、300~400のテーブルを使ってアプリケーションを設計する。Viewerは必要なオブジェクトを抜き出して表示できるため、参照には利便性が良い」（島氏）。



データベース設計・開発工程別作業マップ (Ver.1.0)

「開発方法論、教育、ツールはセットで意味を持つ」と森氏は語る。同社は長期的な視野から努力を続け、開発プロセス標準やガイドライン文書を整備し、データモデリングに関する実践的な研修を受けた300名の開発メンバーを鍛えあげ、データベース設計ツールのER/Studio Data Architect、参照ツールのER/Studio Viewerという専用ツールを駆使する力を身につけたのである。